ドン・ファン・マヌエルの『ルカノール伯爵』[1]について

――現世と来世――

木原太源

国土回復戦も十三世紀後半に入ると、キリスト教徒側に残された敵の回教徒王国は、ムルシアとグラナダの二王国となっていた。

イベリア半島では、この両回教徒王国を除くほとんどの地域は、大別すると、カスティーリャ、アラゴン、ポルトガルのキリスト教王国が勢力を有していた。カスティーリャとアラゴン両王家の間には勢力争の絶え間がなく、その火種にはこと欠かなかった。

野心や野望、権力欲に燃えた王家の人間達が、異教徒との争よりも、しばしば父と息子、息子と母、叔父と甥といった骨肉を分あった者同士が相反目し、彼等を取り巻く他の宮廷内の者達が、各々の権益をめぐって策略や計略を弄し、変心や寝返り、裏切り行為で以て血で血を洗う、政治権力をめぐっての様々なドラマを繰りひろげていた。

このドラマの中で、中世の典型的なひとりの騎士の生涯を演じた役者、つまり、中世という時代の渦中に生まれ、巻き込まれながら成人し、そして自ら渦中の人物となって己の野心を遂げんものと、この抗争の時代に生涯の大半を過ごしてきた、永久に王位に着くことの出来なかった父、ドン・マヌエル親王の子、ドン・ファン・マヌエルが、晩

年になって著わした作品『ルカノール伯爵』を読むと、「いろんな角度から、非常に興味深い個性を醸し出すことにかけてはスペイン第一である」[2]作者、すなわち、ドン・ファン・マヌエルの個性を、手に取って見ることが出来るほど鮮かに感知することが出来るのである。

この作品と時代との間にある緊密な関係から、作者ドン・ファン・マヌエルが抱いていた現世と来世を結び合わせる方法について考察する。

『ルカノール伯爵』の第一の序文の書き出しは、ドン・ファン・マヌエルがこの作品の中で意図するものが何であるかの表明である。

この書は、大へん高貴なドン・マヌエル親王の子、ドン・ホアンが、現世において、名誉・財産・身分の向上に役立ち、魂を救済することの出来る道へ、より一層近づけるような功績を、人々がしておくことを願って著わした。[3]

ここで注意しないといけないのは、点を附した、「名誉・財産・身分」と「魂を救済する道」の二個所である。「魂の救済」だけではなく、「名誉・財産・身分」の向上をも取り扱っているこの二点が、ドン・ファン・マヌエルが、この作品の中で表明しようとする二つの意図である。

第二の序文の中で、再びこの意図を述べる。

恩恵と慈悲の心により、全ての善い行に願を叶えられる申し分のない神は、この書を読む人々に、神に仕える務と魂の救済と肉体の利益のために、これが役立てられんことを願っておられる。また、神は、余、ドン・ホアンがその考えのために申していることもご承知である。(4)

「魂の救済」と「肉体の利益」、前者は天に向う高揚、垂直へと広がる考えであり、後者は地上の水平に広がる考えである。つまり、この世においての豊かな生活とあの世における至福を得ることである。

ドン・ファン・マヌエルは、この作品の中で、この二つの考えをどうすればうまく保持することが出来るか、を述べようとしていることが理解される。しかし、中世の人間が、この二つの考えを同時に手に入れることは、不可能ではないのか、と我々は考える。諸悪の源である現世で、豊かな生活送ることと、永遠の栄光に包まれた神の国である来世へ行くために、魂の救済を求める生活との間には、大きな隔があるからである。

「中世のモラリストがすべてそうであるように、ドン・ファン・マヌエルも、魂の救済については非常な関心を持ち、同時に、常に名誉や財産の問題と苦闘していたのである。(5)」

いずれにせよ、この作品の中で、ドン・ファン・マヌエルは、中世人、特に騎士の生活において、彼が理想とする現世と来世とを結び合わせる方法を、表明しようとしているのである。

『ルカノール伯爵』の第一部、五十一の例話を読むと、彼が序文の中で表明した二つの意図を、結び合わせようと努力をしている例話は、十二あることがわかる。しかし、半分の六つの例話は、天上に視線を向け、魂を救済する方

法への言及は見られるが、現世の利益の方へ傾き過ぎるきらいがあり、地上の、水平に広がって行く考えの方が強いことがわかる。これら十二の例話を除いた残りは、現世の利益を強く述べているだけで、結局、二つの意図を表明している例話は、全体から見るとかなり少ない。

では、十二の例話を一つひとつ見てゆくことにする。

第一話「ある国王とその大臣とに起った事の話」

この例話は、魂の救済について触れてはいるが、ただ、中世の人間が抱くごく普通の考えである、現世を捨て、来世を手に入れる方法を示しているに過ぎない。故に、魂を救済する話は、この例話が教訓として残しておきたかった、Non vos engañedes, nin creades que. endonado, / faze ningún omne por otro su daño de grado.「だまされるな、信じるな、誰も、ただで他人のために、喜んで己の損となることはしないものだ」、という地上的な考えに向けられている物語の、付属物として出されているだけで、あの二つの考えを結び合わせようと、意識して語られているわけではない。

正直に、善き道を通って現世の利益を得るように、と助言するパトローニオの考えは、ドン・ファン・マヌエルが言わんとする考えでもある。

心から忠勤を励む大臣と、彼に多大な信頼を寄せている国王との関係を妬んだ他の大臣達が、奸計を用いて、大臣

の善心を崩さんとする物語である。善心は、再三にわたって奸計の前に屈服しそうになる。その奸計とは、先に述べた、物語の添物として語られる魂を救済する話である。

国王は、嫉妬した他の大臣達の執拗な働きかけにより、一切の物を捨て、遠い見知らぬ土地で、ただひとり、行者の生活をすることにより余生を送りたい、後のことは全て大臣に任せる、と密かに、何度も告げて大臣の反応を窺う。現世を捨て、来世への道へより近づけるように、行者となって魂を救済する生活を送りたい、と会う度毎に語り、王国のことは全てお前に任せたい、と大臣に願う国王の言葉に、栄達の気が心に兆し、現世の利益の前に、大臣の善心は脆くも崩れそうになるが、彼の良き助言者の忠告に従って、甘言に現をぬかして、利を求め過ぎることによる結果を忘れていた大臣は、キリスト教徒としてのモラルを再び取り戻し、国王と行を供にし、自からも行者となり、終生国王に付き従おうとする。国王は、この時、はっきりと、大臣の変らぬ忠誠の心を知り、これ迄以上に信頼を託すことになる。

格言が「誰も、ただで他人のために、喜んで己の損となることはしない」、と言っているように、現世において良い利益を、天に対しても恥ずかしくない利益を得るには、真正の善心が必要である、とドン・ファン・マヌエルは説く。

第三話「イングランドのリチャルテ（リチャード）王が回教徒軍に向って海に飛び込んだ事の話」

これは最も重要な例話で、「彼の生涯を要約するような、自伝的な様相で以て物語は始まる。」[6]

お前もよく知っているように、余はすでに年老いた。生まれてからこの方迄、いろんな事が起った。或る時はキリスト教徒、また、或る時は回教徒と、さもなければ、常に余の主君である国王や隣人達と戦をし、その最中で成長し、日々を過ごしてきた。(7)

一三三〇年以降、身心共に落着のある生活を送るようになるドン・ファン・マヌエルは、これ迄に、自ら引き起した数々の災厄に悔恨の念を催していたので、

余が原因となる争は一切引き起さずにいようと、常に身を保持してはいても、キリスト教徒達と戦が始まると、罪のない人々を、この上もなく苦しめることを、避けることは出来なかった。余が、我らが主なる神に対して行った様々な過誤により、何人に、何物に縋ろうとも、一日たりとも死を免れることが出来ないこともわかっている。当然のことながら、この齢からも、これ以上長生き出来ないことも確である。言葉や他の方法を用いて言い逃れが出来るものではなく、これ迄の善悪の行によってのみ判断を下される審判官、神の前に、出頭しなければならないことも承知している。不運にも、真正なる神が、余の罪となるものをお見つけになれば、永遠に留らねばならない地獄の苦しみの許へ、行くことは避けられない。現世での事が、余に利をもたらさなかったのだから。もし神が、余に善き行があることをお見つけになり、大いなる恩恵を施されるのなら、神の下僕の仲間となり、楽園を得るように、余をお選びにならねばなるまい。この幸福、この喜び、そしてこの光栄を、世のいかなる喜びとも比べられるものではないことは申す迄もない。この幸福や不幸は、行によってのみ手にすることの出来るものであるから、余の貴族としての身分

に準拠して、神の意に反して行った数々の過誤に対し、罪の償が出来、神の恵みを得られると判断する最良の方法を、考え助言してくれることを願う。(8)

ルカノール伯爵、つまり、ドン・ファン・マヌエルがこの物語の中で問題にしているのは、すでに年老いて死を間近に感じるようになり、魂の救済を得るために、努めねばならないことを知った彼が、天の至福を得るか、地獄の苦しみを得るかは、現世で持つ物によってではなく、これ迄になした行によって判断されるのであるから、その行が、数々の過であるならば、それを払拭出来る時にしか、天の至福を得ることは出来ない、ということである。

パトローニオは伯爵に答える。

伯爵様が、ご自身の身分と名誉を守りつつ、神に、これ迄の過誤の罪の償をしたい、と申されるのは非常に嬉しうございます。ルカノール伯爵様、殿様が身分をお捨てになり、独り遠く離れた所で、信仰の生活にお入りになりたいのなら、殿様に、次の二つの事が持ちあがるのを避けられません。第一は、世間の人からひどく批難されることとなります。つまり、人は、勇気のなさからそれをしたのであり、貴人達の間で生活するのが嫌になったのだ、と噂をするでありましょう。第二は、もし伯爵様が、信仰の苛酷な生活に耐えることが出来なくて、信心の道を捨てるか、留って生活をしても、当然の教をお守りにならないのであれば、殿様の魂が受ける傷は非常に大きく、また、肉体や魂や名声にとって大きな恥辱であり侮辱となりましょう。(9)

パトローニオは、現世を捨てることによる魂の救済方法を、助言しているのではないことがわかる。

現世を捨てることは、「臆病になった」故であり、また、仮に信仰の道に入っても、「現世での生活に慣れ過ぎている者にとっては、そこでの生活の苛酷さに耐えることは出来ない」のだから、魂救済を求めて隠退生活に入ったのに、逆に、魂はより悪くなるだけであり、肉体迄も損うであろう、という言葉に端的に表わされている。

ドン・ファン・マヌエルは、身分を維持しながら天国を得ることは可能である、つまり、現世にあって、それを利用しながら天国を得ることは可能なのだ、と述べる。

彼によると、現世での利を維持しながら、来世での幸福を得るという考えは矛盾するものではなく、身分の高い者は、その二つを手に入れる義務がある、と確信している。

現世を捨てることは、身分を捨てることであり、騎士としての勇気が衰えたことでもあり、支配階級から逸脱することである。階級という垣根を越えて離脱することを、良しとしなかった当時の社会組織を考える時、現世を捨てる行為は、社会秩序、或は、しっかりと構築された階級制度を危くすることを意味する。このような行動に対するドン・ファン・マヌエルの反感は、相当なものであったことを知る手掛りの一つに、彼がドミニコ会の熱心な支持者であったことからも推察することが出来る。

ドミニコ会の創始者、「聖ドミンゴ・デ・グスマンは、ベネディクチン派の素朴な僧生活に真向から反対し、世間に出て、民衆に、正統なキリスト教教理を知らせるために教団を創設し、ローマから多岐に分れたキリスト教の考え方を阻止する」[10]という、力強いはっきりとした考えの下に行動をしていた。

ひとつの枠を越えて、自由な、好き勝手な考えにより、秩序を乱し、組織の中心から、常に逸脱しようとする行動や考えを、容認出来なかったドン・ファン・マヌエルには、意に適った教団だったのである。彼は、自らの手で、ペ

ニャフィエルの領地に、この宗派の修道院を建立し、死後、彼の遺体はそこに埋葬されたのである。

ドン・ファン・マヌエルが言わんとすることは、騎士には、騎士としての身分や地位にふさわしい、魂の救済方法があって、ただ、現世を捨て行者の生活を送れば、騎士としてこれ迄に犯した数多くの過の償が、簡単に出来る訳のものではない。勿論、行者の生活を送ることは、魂の救済には非常に効果のある方法ではあるが、多くの善行を積まねばならないし、その為には、苛酷な生活にも耐え忍ばねばならないことになる。多数の人を殺し、盗みを働き、奔放な生活を送るという、行者の生活とは、まったく異る生活を送ってきた騎士には、騎士でないと出来ない神への務、魂を救済する方法がある。騎士も、中世の人間として、やはり魂の救済に心を配っているのであり、神にその機会を与えて下さるように、と願っているのである。罪人の改心を望まれ、その願いを叶えられる神は、騎士の身分にふさわしい機会を与えられるのである。

つまり、獅子の心を持つイングランドの王が、十字軍遠征の船上より、聖地を前にして、敵の回教徒の軍勢で満ち溢れる海岸に向って、馬乗のまま海に飛び込み、多勢の敵を剣で差し殺した行為こそ、騎士にのみ与えられている魂を救済する方法である。この行為は、カトリック教に大きな利をもたらすことであり、騎士としての勇気の発露であり、まさしく、神に捧げた大きな務である。殺された回教徒の兵士達は、騎士の魂の救済を意味するのである。

天使が述べたように、リチャード王の働きは、栄光を得るにふさわしい功績であり、行者の苦しく苛酷な務に優るとも劣ることのない大きな務である。

ドン・ファン・マヌエルは、天国を得る考えには二つあることを、この物語で提示してはいるが、行者的な生活を送りながら功績を積む方法よりも、積極的なイングランド王のような行動の方を重要視し、リチャード王の、騎士と

してのひとつの善行と、行者のこれ迄の苛酷な全生活とを、同等視していることがわかる。

現世を捨てずに天国を得るだけでなく、名誉や財産や身分や名声をも得ることが出来るのであるから、騎士が持つ魂を救済する方法の利は、非常に大きいものがある。

Qui por cavallero se toviere, / más deve desear este salto, / que non si en la orden se metiere, / o seençerrasse tras muro alto.「騎士であると自認する者は、高い壁を廻らす修道院に入り閉じ込もるよりも、このひと飛びを願うべきである。」

騎士道こそ、あの二つの意図を結び合わせるために取らねばならない道である、と表明する。

第四話「あるジェノバ人が死の間際に己の魂に言った事の話」

この例話では、はっきりと、魂の救済について述べているのではなく、肉体が亡びる時の魂についての話である。己の魂と肉体とは同一であると考え、来世へ魂が行かないように、つまり死を免れたいがために、ジェノバ人が生涯をかけて集めた全ての財産を、魂に提供する話である。

全財産と魂を同等視しているところは、キリスト教的ではない。つまり、この例話では、ドン・ファン・マヌエル

は、彼の二つの意図を、結び合わせようとする考えを表明しているのではなく、財産のことで忠告をしておきたいがために、要するに、現世での利に役立つ考えの方を、教えようとしたまでである。

Quien bien se siede non se lieve.「ゆったりと座している者は、立ちあがらない。」

第十四話「金貸し業者に説教した時、聖ドミンゴが行った奇跡の事の話」

この例話では、魂の処置に心を配らずに、金銭を集めることに全力を尽すこは危険である、という考えを述べる。ルカノール伯爵が、将来に起る事をみこして、出来るだけ沢山の金銭を集めるべきかどうか、と助言を求めたことに、パトローニオは、偉大な君主という者は、自分の責任範囲の務を果すには、それ相当の金銭を持つべきであるが、臣下の者を無視したり、自分の名誉や名声を汚すほど、気にかけ過ぎてはいけない、と助言する。物語の終りで、パトローニオは次のように進言する。

ルカノール伯爵様、先にも申し上げましたように、財産は役に立つものでありますが、次の二つのことをお守り下さい。

一、お集めになる金銭は合法な手段によるものであること。

二、ご自身にとってふさわしくない事をおやりになったり、体面も返りみず、やるべきことを放棄して迄も、金銭に心を奪われてはいけません。正々堂々と、沢山の金銭をお集めになることは、神の恵みと人々の好評を得ることに

なります。[11]

ドン・ファン・マヌエルは、この物語の中で、彼の二つの考えをうまく結び合わせていることがわかる。地上の、水平的な考えは金銭によって表わされ、金銭は、現世において獲得することの出来る、一番大きな利益の象徴である。この象徴と魂の救済方法とを結びつける。好ましい方法で集めた金銭には、神の恵みと人々からの好評も得られるが、不正な手段で集めたり、夢中になり過ぎ、体面も考えず、誇りを汚してまでも金銭に近付き過ぎるのはよくない、と助言するドン・ファン・マヌエルの、現世の利についての考えは、現代の我々にも価するものである。

彼は、支配階級である君主達に対して、名を高めようと努めることは、同時に立派な功績も積み上げることであり、それは、魂を救済する道へと通じることでもあるが、名を高める行をする前に、イングランド王のように、心からこれ迄の過誤を悔恨し、そして神に償をすることが必要である、と説いている。

Gana el tesoro verdadero, / et guárdate del falleçedero.「真の宝を得よ、やがて尽きる宝は避けよ。」

魂の救済と関連させて、現世での利である財産や身分に基づく名誉・名声を語るドン・ファン・マヌエルは、天上へと向う考えと、地上的な考えを結び合わせようと努めてはいるが、やはり、彼や君主達に、あくまでも都合のよい考えとなっていることがわかる。

しかしながら、先の第三話及びこの第十四話では、ドン・ファン・マヌエルが、現世を利用しながら魂を救済する最良の方法や、魂の救済を損わずに現世での利益を維持出来る方法は何か、というこの作品の基本的な二つの考え

を、表明していることがわかる。

第二十六話「嘘がもつ木に起った事の話」

この例話では、「あなたは隣人について、偽証してはならない」という十戒の一つをテーマにしている。

現世における徳は来世のものでもある、という考えを、ドン・ファン・マヌエルは、嘘について語りながらその裏に真実を現わし、真実を現世の目的の第一と考え、嘘を真実の反面教師とし、キリスト教的観念から常に真実を述べることを結論づける。

だから、パトローニオは物語の終りの個所で、

しかし、たとえ真実が侮られようとも、伯爵様は、真実をしっかりと抱き、大切になさって下さい。真実によって、幸福になるでしょうし、幸福に死も迎えられます。現世においては、多くの利益と大きな名誉を、来世においては、魂のために救済を与えられる神の恵みが得られることを、お信じ下さい。(12)

と述べ、更に、Seguid verdad por la mentira foyr, / ca su mal cresçe quien usa de mentir.「嘘を避け、真実に従え、禍は嘘を吐く者が育てるから」という格言をルカノール伯爵に記述させるのも、唯、嘘吐きの友はあなたの財産を損う、という現世の利益を守るための教訓を与えたかったからである。

この第二十六話では、ドン・ファン・マヌエルは、結局、二つの考えの内、地上での利益に重点を置いて述べているだけである。

第三十三話「ドン・マヌエル親王の聖鷹と鷲と鷺とに起った事の話」

この例話では、魂を救済する最良の方法として、第三話でも述べられていた、回教徒と戦うことである、という考えが表明されている。

現世の事で、伯爵様が神にお仕えすることが出来ますのは、ご身分から申しましても、神聖にして真のカトリック教を称揚するために、回教徒と戦をする事でございます。(13)

しかし、パトローニオは、伯爵に、何がなんでも回教徒と戦え、と言っているのではなく、身の安全を脅やかす別の敵の危険を避けることが出来てからでよい。先ず、己の財産をしっかりと守らねばならない。その後で、カトリック教会の財産を守ればよろしい、と助言する。そして、君主たる者は、騎士としての職務に励むことが、現世を捨て魂の救済を得ようとする生活にもまして、大事なのである、と説く。

教会の財産を後廻しにして、第一に己の財産をしっかりと守らねばならない、と述べていることから、天の方への考えよりも、地上の方への考えに傾きかけてはいるが、ドン・ファン・マヌエルが好む、騎士として果さねばならな

い立派な行、つまり、魂を救済する方法は、回教徒と戦うこと、という彼の理論への影響は小さいものと考える。

Si Dios te guisare de aver siguranca, / puña de ganar la complida bien andança.「神が、汝に守護を与えようとお考えならば、汝は、申し分のない立派な運命を得ようと、努めよ。」

第四十話「カルカソーナのある宮内大臣が何故に魂を失ったかの話」

この例話の主人公は騎士ではないが、パトローニオは、死後、罪の償に役立ち、永遠の名声を残せるような立派な行として、施しをする、という考えを、魂を救済する方法として提出する。

現世を捨てずに魂を救済する方法を持つ騎士とは、異る方法を取り扱っている。つまり、この物語では、現世において善い行をする方法として、施し、与える、という考えを表明する。しかし、ドン・ファン・マヌエルは、この施しをするという考えに、必要条件として、必ず、立派な意図によって行うこと、と繰返し述べ、そのために必要な五つの条件を説明する。

一、合法な手段で手に入れた物で行うこと。二、心から罪の償として行うこと。三、一番大切な物を沢山与え、己の分が不足するほど与えること。四、生命ある間に行うこと。五、唯々、神のために行うこと、虚栄心やうぬぼれのための行であってはいけない。(14)

ドン・ファン・マヌエルの考えでは、施しをするという行為は、世間の名声を得るために行うものではなく、心からの罪の償のために行う、立派な行為でなければならない、と考え、Faz bien et a buena entençión en tu vida, / si quieres acabar la gloria complida.「栄光が約束された最後を望むのなら、生命ある間に正しい意図で善をなせ」と説く。施しをするという行は、彼の二つの考えにどのように役立つものであるかを表明している。

第四十五話「悪魔の友と従者とになった男に起った事の話」

この例話では、来世のことが考えられていて、魂の救済に役立たない行為を禁じる話である。

財産をすっかり失くして、困窮状態に身を落しても、悪魔の誘惑に屈服し、彼を信じ、彼の助けにより盗みを働きながら、これ迄以上の財産を手にする利益を得ることが出来ても、その結果、魂が受ける打撃は測り知れない位大きいものであるから、決して、悪魔の誘惑に乗り、彼と関係してはいけない、と述べる。

El que en Dios non pone su esperança, / morrá mala suerte, abrá mala andança.「神を信頼しない者は、悲惨な最期をとげ、悲運をなめる。」

悪魔の友となった男と、悪魔との間に交される対話のおもしろさが目立つ物語で、ドン・ファン・マヌエルの二つの考えを、理論づけて述べている話ではない。

第四十八話「友人達を試した男に起った事の話」

この例話では、「困った時の友こそ真の友」という諺を、現世的な意味における利益だけではなく、魂の救済にも役立てる方向で用いようとしている。

或る人が逆境に落入った時、果して、これ迄に得た友人の何人が、自己を犠牲にして、その人を救おうとするか？パトローニオは、真の友人を見出すために試す最良の方法として、先ず、友人達に疑念を抱くことである、と助言する。彼がすすめる方法は残酷で、友人の罪と罰をかばうために、無実である自分の息子を犠牲にさせようとする。この犠牲を払ってくれる友こそ、真の友であり、真の友情というものは、自己犠牲を行える者同志の間で成立するものである、と説く。まったく、拒否することなく罪を共有し、友に代って罰を受ける友の友情を、神が人間に示された最高の愛と同じである、と考える。そして、崇高な自己犠牲は、永遠に魂が救済されることでもある、と説明する。

父親にして真の友である、我らが主なる神は、自らの創造物である人間に抱く愛情から、申し分のない友として振舞われた。つまり、神は、何の罪禍も無い神の子、イエス・キリストに、人間が受けるべき罪禍をかばうために、死をお命じになったからである。(15)

ドン・ファン・マヌエルは、この物語の終りの個所で、キリストは父性愛のためではなく、友情の現われとして、人間に、自らの命を犠牲にされたのではないか、と表明している。

Nunca omne podría tan buen amigo fallar / commo Dios, que lo quiso por su sangre comprar.「神ほど最良

の友はいない、自らの血で友情を購おうとされたのだから。」

第四十九話「有していた領地を取り上げられ裸で島に捨てられた男に起った事の話」

この例話では、領地とは、ルカノール伯爵、つまり、ドン・ファン・マヌエルが日々の生活を送っている現世を意味し、裸は死を、島は来世を意味している。

或る邦では、毎年君主を選び、一年後には、身に付けている一切の物を含めて全ての物を取り上げ、島に捨てる、という慣習があった。

これ迄にも、何人もの人が君主に選ばれ、一年後には、裸で島に捨てられ、そこで惨な生活を送っていた。或る年、君主に選出された男は、これ迄の者達に比べて、はるかに賢明で慎重であったので、一年後のことを考え、島に追放されてからの生活を、快適なものにするため、秘かに家を建て、必要な物を全て準備し、整えておいた。そして、万が一にも、不足する物が生じ必要となった場合には、頼みを聞き、それを叶えてくれる少数の、真に誠実な友にのみ、一切のことを打明けておいた。

一年後、この男は島に捨てられたが、これ迄の賢明で慎重な行為により、快適な生活を、その島で送ることが出来た。

ドン・ファン・マヌエルは、君主に対して、現世において、全ゆる物に利を見出し、己の利益とし、快適な生活を

送るのはよいが、来世における快適な生活、つまり、魂の救済を得るためには、現世において積み上げた、善い行によってのみ得られるのであり、それも、虚栄心やうぬぼれの感情が、一切入っていない行為のみが神に認められるのであるから、現世において、死の旅出となる時に、神の恵みが得られる、善い行をしておくように、と繰返し述べ、Por este mundo falleçedero, / non pierdas el que es duradero.「やがて尽きるこの世のために、永遠の世を逸するな」と結ぶ。

第四十八話と同じように、ここでも、ドン・ファン・マヌエルは、真に誠実なる友を得ることは、来世での快適な生活を送るために必要である、という考えを表明している。

第五十話「サラディンと臣下の妻とに起った事の話」

人間が、心の中に持つことの出来る最良の善心とは何か、とのルカノール伯爵の問に、パトローニオは次の例話をする。

臣下の妻を己が物にしたくなったサラディンが、彼女の夫を遠隔地へ派遣し、彼の留守の間に、妻に言い寄るが、慎しみ深く賢明な女性は、主君の態度を婉曲的に戒めんものと、全ての善心の源であり基である、人間が持つことの出来る最良の善心とは何か、と尋ね、その答がおわかりになれば、サラディンの求めに応じる用意がある、と述べる。

これを受けて、サラディンは吟遊詩人に身を俏し、少数の供の者を連れて、世界を廻り、答を探し求めてくる話で

ある。

その答は、「恥辱」で、この物語の主要テーマである。

恥を知る心、何が恥となるのかを知る心、これが、人間が、己の財産をよくするために、持たねばならない最良の善心なのである。これ迄に述べてきた教訓の全てが、この言葉の中に内包されてしまうほど、大切なテーマとなっている。

この物語における、水平に拡がる現世的な考えは、人間は、己の財産や名誉を良くするために、持たねばならない最良の善心とは何か、を知ることであり、また、最良の人間とは何か、という、人間についての知識をテーマとしていたものが、やがて、現世と来世の両方に通じる善心、恥の心を持つ人である、という、天上の方へ視線が向けられた話へと移って行く。この物語には、完全に、天上と地上との両方の考えについての言及があることがわかる。

ドン・ファン・マヌエルは、最良の人間とは、「神と現世に属する両方の道を保持する人である」[16]、とはっきり述べる。しかし、これは、「言うは易し、行うは難し」で、当時のほとんど全ての人が、この両方の道を保持しようと努めてはいなかったのであり、ドン・ファン・マヌエル自らも、「熱さを感じることなく火の中に手を入れる」[17]ほど難しいものであると、正直に言っており、その道を得るためには、善い行としっかりした分別が大変重要である、と述べる。

La vergüença todos los males parte; / por vergüença faze omne bien sin arte.「恥は全ゆる悪のもと、恥のために、たくまずとも人は善をなす。」

第五十一話「強大な権力を有し且つ尊大であったキリスト教徒の王に起った事の話」

この例話では、これ迄に一度も出てこなかったが、偉大な君主に捧げられたこの作品にあっては、大変必要であるテーマ、「謙遜」について述べている。同時に、二つの意図をもドン・ファン・マヌエルは表明している。

謙遜は、人間が、神に対して、非常に楽しく快く振舞うことの出来る事である、と多数の人々が認めてはいるが、逆に、謙虚な人間は、他人に蔑まれたり、また、勇気や気力の無い人、と多くの者におもわれる。それに反して、尊大は、偉大な君主にとって、大変似つかわしいものである。この二つの何れが、君主に最もふさわしい態度であるか、を助言してほしい、とルカノール伯爵がパトローニオに問う。パトローニオは次のような話をする。

ある尊大なキリスト教徒の王が、聖母マリア讃歌の言葉「神は力強き者を屈服させ、謙虚なる者を称揚した」という個所を、「神は力強き者を称揚し、謙虚なる者を地に倒された」と書き改めるように、国中にお布令を出すという思い上ったことをした。そこで神の怒りを受け、この強慢な王が、どのような罰を受け、最後に、どのように悔い改めたかの物語である。

あることから、天使がこのキリスト教徒の国王に成代る。国王は物乞いの身となり、いくら、この国の王である、と真実を述べても、誰ひとりそれを証してくれる者はなく、その身形から、そして、現に、天使が成代った国王がいることから、誰にも相手にされず、気違い扱いを受け、自らも、国王であったのかどうか、わからなくなってしまうほどの惨な状態に落入る。

しかし、悔い改めの機会を常にお与えになる神は、国王に成代った天使の耳に、自分はこの国の王である、と言い続ける物乞いの噂をお入れになり、宮廷にお呼びになって、その理由を尋ねられる、という好意をなされた。

物乞いの身となった国王が、且つて、マリア讃歌の言葉を改悪してしまうほど尊大であった自らを後悔し、その罰として、今、このような賤しい身分に落ち、同時に、神の恵みも失ってしまったことを嘆き、心から悔い改める気持を表わした時、天使は、再びこの男を、元の国王の地位にお戻しになったのである。

天使は、全ゆる罪の中でも、特に、この尊大な態度ほど、神に向って弓を引く行為はなく、また、易々と人の心を奪ってしまうものであるから、神が最も嫌悪されているものである、と説く。

国王は、民に、これ迄の一切の罪を詫び、以後、立派な君主として神に仕え、民のために、大いに務に励まれ、これによって、神は慈悲の心をお示しになるために、国王に、現世での名声と、来世における栄光とをお与えになることになった。

Los derechos omildosos Dios mucho los ensalça, / a los que son sobervios fiérelos peor que maça.「謙虚で正しい人を、神は大いに称揚なさるが、強慢なる者には槌よりもひどい扱いをなさる。」

現世と来世とを結び合わせようとする、ドン・ファン・マヌエルの考えが、この物語において、謙遜と大君主達の地位の二つに象徴されて、見事に結び合わされている。

以上、考察してきた十二の例話の中で、ドン・ファン・マヌエルが、第一、第二の序文で表明していた二つの意図を比較的うまく結び合わせているのは、第三、第十四、第三十三、第四十、第四十九それに第五十一の例話の中においてであることがわかる。

第三と第十四の例話では、全体を通じて重要である、ドン・ファン・マヌエルの二つの意図を、うまく結び合わせる論理というべきものが提出され、そして、客観的にそれを実践する方法も示される。第四十と第四十九では、「施し」と「善い行」という、偉大な君主にふさわしい、魂を救済するもうひとつの方法が現われる。そして第三十三と第五十一では、これ迄の四つの例話で表明された、ドン・ファン・マヌエルの理論を、より具体的に述べることになる。つまり、第三十三の例話の中で、回教徒と戦うことがキリスト教徒として、また、立派な騎士としての務である、と称賛する言葉は、ドン・ファン・マヌエルが表明してきた魂を救済する方法の理論の一つの説明であり、第五十一の「謙遜」について取り扱っている例話の中で、ドン・ファン・マヌエルが物語っていることは、これ迄にも繰返し執拗に彼が表明してきた、キリスト教への彼の答えであり、結論である。

ドン・ファン・マヌエルが君主達にすすめている、現世を捨てずに魂を救済する方法を簡単にまとめると、次の二つであることがわかる。

一、騎士としてキリスト教のために功績をなすこと。

一、キリスト教徒として立派な行をしながら財産を管理すること。

『ルカノール伯爵』第二・第三・第四部は、文体が共通しているところから、一括して述べることにする。つまり、これら三部は、数の多少はあるものの、全て諺（provrbio）或は格言（máxima）によって表現されている。

第二部の序文において、ドン・ファン・マヌエルは、ヘリカの君主ドン・ハイメの、もっと難しい表現を用いて著わすように、との要請を受け入れ、格言や諺という様式を用いることにしたのである。

これら三部は、第一部に比べて、あまり重要な意味を持っているわけではなく、どの点から見ても、興味を引くものはない。ほとんどの諺が、通俗的な知識や道徳観の覚え書にすぎず、一般的な経験や観察から作り出されたものといえる。

第一部の例話の中で述べていた諺を、敷衍したものや、新たに、ドン・ファン・マヌエルが、人間観察から得た知識や宗教的な観念等を述べたりしているが、そこで用いられる言葉は、語呂合のような、遊びの傾向が見られるようになり、更には、言葉を極端に省略したり、語順を完全に入れ換えたりして、意味が不明で理解し難くなる。

ドン・ファン・マヌエルの、あの二つの意図を盛り込んで述べられているわけでもなく、唯、世俗的な利益と分別について語っているに過ぎない。

第五部では、ドン・ファン・マヌエルが、その序文の中で述べているように、例話や諺の使用を止めたことにより、前の四部とはずいぶん異った様子を呈している。

この最後の部分は、全体を二つに分けることが出来、前半は、魂をしっかりと守り、その救済のためには善い行を

すべきで、決して悪い行をしてはいけない。魂の救済にとって、どのような行が善であり、またいかなる行が悪であるかを、繰返し何度も述べる。

後半は、人間とは何か？　現世とは一体どういうものであるのか？　人間は現世においてどのように過すのか？　現世において、人間が振舞うことからどのような褒賞を受け取るのか？　という問について、ひとつひとつ説明をしていく過程において、ドン・ファン・マヌエルの二つの意図が盛り込まれ語られて行く。

しかしながら、ドン・ファン・マヌエルの本音が現われているのは、やはり第一部の例話を語っている時であり、第二部以降になると、善きキリスト教徒である、という身構えが強まり、更に、教え訓す態度も強くなって、興味は減少する。

「彼は、生来、矛盾だらけの男であり、彼の生涯と作品との間には極端な隔や違いがある」[18]と評されるのも、ドン・ファン・マヌエルの生立ちに、その原因の一端はあると考えるが、戦と宮廷内の隠謀に対処するために明け暮れた彼の生涯をおもうと、高尚なる義務感を持ちあわせることは不可能であった、と考えられる。だからといって、何がなんでもこのように生きねばならない、と努力したわけでもないが、彼の中で、善と悪の両方が交り合い結びついているところが、ルネサンスの人間をおもわせる、彼の個性的なところである。

残念ながら、彼は、本当に、善意あるキリスト教徒ではなかったが、精神の必要をまったく考えなかった人間でもない。

故に、キリスト教徒として、およそかけ離れた行為で人生を送ってきたドン・ファン・マヌエルは、晩年になり、死を間近に感じるようになった時、善きキリスト教徒であった、とおもわれんがために、同時に、人々に、善きキリスト教徒としてどのような行を、この世において、しておくべきであるか、という教訓を与えるために、『ルカノール伯爵』を著わしたのである。

註

(1) テキストとして、Dun Juan Manuel : *El Conde Lucanor*. Edición, introducción y notas de José Manuel Blecua, clásicos castalia, Madrid, 1971. を使用。翻訳はすべて木原の訳によるものである。この作品は、一三三五年、作者五十三才の時に著わされた。

(2) Introducción de *El Conde Lucanor*, p. 16

(3) Este libro fizo don Iohan, fiho del muy noble infante don Manuel, deseando que los omnes, fiziessen en este mundo tales obras que les fuessen aprovechosas de las onras et de las faziendas et de sus estados, et fuessen más allegados a la carrera porque pudiessen salvar las almas.

(4) Et Dios, que es complido et complidor de todos los buenos [fechos], por la su merçed et por la su piadat, quiera que los que este libro leyeren, que se aprovechen del a serviçio de Dios et para salvamiento de sus almas et aprovechamiento de sus cuerpos; asi commo Él sabe que yo, don Iohan, lo digo a essa entención.

(5) Introducción de *El Conde Lucanor*, p. 29.

(6) Andres Gimenez Soler : *Don Juan Manuel, biografia y estudio crítico*, Zaragoza, 1932.

(7) Vós sabedes muy bien que yo non so ya muy mançebo et acaesçióme assí: que desde que fuy nascido fasta agora, que siempre me crié et visque en muy grandes guerras, a vezes con cristianos et a vezes con moros, et lo demás siempre lo ove con reys, mis señores et mis vezinos.

(8) Et quando lo ove con cristianos, commo quier que siempre me guardé que nunca se levantase ninguna guerra a

mi culpa, pero non se podía escusar de tomar muy grant daño muchos que lo non meresçieron. Et lo uno por esto, et por otros yerros que yo fiz contra nuestro señor Dios, et otrosí, porque veo que por omne del mundo, nin pro ninguna manera, non puedo un día solo ser seguro de la muerte, et so çierto que naturalmente, segund la mi edat, non puedo vevir muy luengamente, et sé que he [de] yr ante Dios, que es tal juez de que non me puedo escusar por palabras, nin por otra manera, nin puedo ser jubgado sinon por las buenas obras o malas que oviere fecho; et sé que si, por mi desaventura fuere fallado en cosa por [que] Dios con derecho aya de ser contra mí, so çierto que en ninguna manera non pudié escusar de yr a las penas del infierno en que sin fin avré a fincar, et cosa del mundo nondo non me podía y tener pro, et si Dios me fiziere tanta merçed porque Él falle en mí tal meresçimiento, porque me deva escoger para ser compañero de los sus siervos et ganar el Parayso; sé por çierto, que a este bien et a este plazer et a esta gloria, non se puede comparar ningún otro plazer del mundo. Et pues este bien et este mal tan grande non se cobra sinon por las obras, ruégovos que, segund el estado que tengo, que cuydedes et me conseiedes la manera mejor que entendiéredes porque pueda fazer emienda a Dios de los yerros que contra Él fiz, et pueda aver la su gracia.

(9) mas plázeme mucho porque dezides que queredes fazer emienda a Dios de los yerros que fiziestes, guardando vuestro estado et vuestra onra; ca çiertamente, señor conde Lucanor, si vós quisiéredes dexar vuestro estado et [tomar] vida de orden o de otro apartamiento, non podríades escusar que vos non acaescieçen dos cosas: la primera, que seríades muy mal judgado de todas las gentes, ca todos dirían que lo fazíades con mengua de coraçon et vos despagávades de bevir entre los buenos: et la otra es que sería muy grant marabilia si pudiésedes sofrir las asperezas de la orden, et si [despues] la oviésedes a dexar o bevir en ella, non la guardando commo devíades, seervos ýa muy grant daño paral alma et grant vergüença et grant denuesto paral cuerpo et para el alma et grant denuesto paral cuerpo et para el alma et para la fama.

(10) María Rosa Lida de Malkiel: III Tres notas sobre don Juan Manuel de *Estudios de Literatura española y comparada.* (Eudeba, Buenos Aires, 1966) p. 92.

(11) Et vós, señor conde Lucanor, commo quier que el tesoro commo desuso es dicho, es bueno, guardad dos cosas: la una, en que el tesoro que ayuntáredes, que sea de buena parte: la otra, que non pongades tanto el coraçón en el tesoro porque fagades ninguna cosa que vos non caya de fazer; nin dexedes nada de vuestra onra, nin de lo que devedes fazer, por ayuntar grand tesoro de buenas obras, porque ayades la gracia de Dios et buena fama de las gentes.

(12) mas, aunque la verdat sea menospreçiada, abraçatvos bien con ella et preciadla mucho, ca çierto seed que por ella seredes bien andante et abredes buen acabamieno et ganaredes la gracia de Dios porque vos dé en este mundo mucho bien et mucha onra paral cuerpo et salvamiento paral alma en l'otro.

(13) et sabedes que en cosa del mundo, segund el vuestro estado que vós tenedes, non le podedes tanto servir commo en aver guerra con los moros por ençalçar la sancta et verdadera fe católica,

(14) la una, que se faga de lo que omne oviere de buena parte; la otra, que la faga estando en verdadera penitençia; la otra, que sea tanta, que sienta omne alguna mengua por lo que da, et que sea cosa de que se duela omne; la otra, que la faga en su vida; la otra, que la faga omne simplemente por Dios et non por vana gloria nin por ufana del mundo.

(15) Et nuestro señor Dios, assí commo padre et amigo verdadero, acordándose del amor que ha al omne, que es su criatura, fizo commo el buen amigo, ca envió al su fijo Ihesu Christo que moriese, non oviendo ninguna culpa et seyendo sin pecado, por desfazer las culpas et los pecados que los omnes meresçían.

(16) Los que guardan entreamas las carreras, que son lo de Dios et del mundo.

(17) commo meter la mano en l' fuego et non sentir la su calentuera.

(18) Introducción de *El Conde Lucanor*. p. 13.

参考文献

o Angel Valbuena Prat: *Historia de la literatura española*, 1 (Gustavo Gili, Barcelona, 1957), p. 163-183.

○ Juan Luis Alborg: *Historia de la literaturatura española*, 1 (Gredos, Madrid, 1970), p. 279～297.
○ J. Amador de los Ríos : *Historia crítica de la literatura española*, segunda parte, cap. XVIII.
○ H. Tracy Sturcken: *Don Juan Manuel* (Twayne Publishers, Inc. New York, 1973)
○ Joaquin Gimeneo Casalduero : *El Conde Lucanor, composición y significado de la creación literaia de la Edad Media y del Renacimiento.* (José Porrúa Turanzas, Madrid, 1977)
○ Reinaldo Ayerbe-Chaux: *El Conde Lucanor, materia tradicional y orinalidad creadora.* (José Porrúa Turranzas, Madrid, 1975)
○ F. Huerta Tejadas : *Vocabulario de las obras de don Juan Manuel*, en el Boletín de la Real Academia Española. (Madid, 1956)
○ Ian Macpherson & others: *Juan Manuel Studies.* (Tamesis books, London, 1977)
○ Ricardo Arias Arias : *El concepto del destino en la literatura medieval española*, cap. VII. (Edición Insula, Madrid, 1976.)
○ Marcelino Menéndez y Pelayo : *Orígenes de la novela.* (C. S. I. C., Madrid, 1961), III.